

さて、毎年四万十川に行く時、楽しみにしていることがいくつかある。そのひとつが今回の標題にしているクロソンでありムテムカなのだ。

クロソンは黒尊川という川のことである。高知県と愛媛県の県境付近にある というブナの原生林を源流に持ち、口屋内というところで四万十川に合流する。私たちは合流地点の少し上のところでいつも水遊びをする。その淵そのものが、周辺の集落の水源になっていることから、いかにこの水がきれいであるかわかっていただけである。どんなに暑い日でもこの水はひんやりと冷たい。水につかるまではちょっとした勇気がある。淵は、5～6mはある結構深いところだが、底の石や魚が手に取るように見える。私たちは水中めがねを持って河童のように浮かんで水の中の世界を楽しむ。水が澄んでいるとはこういうことを言うのだと思う。水族館なんか比べものにならない最高の贅沢、至福のひとつである。去年はあまり見つからなかったが、川海苔が採れることもある。その川海苔を味噌汁にでも入れて食べる川原の夕食は、どんな高級レストランのディナーよりもおいしい。いや、価値基準が違うのだから比較すること自体無意味である。もっとも一昨年（96年）ここで遊んでいたら、角とかいうプロ野球出身のタレントがやってきて、テレビ撮影でどかさされたのは今持って腹が立つ。



この口屋内もそうだが、四万十川には前述の沈下橋という欄干のない橋がいくつもある。四万十川の一つの特徴的な風景といってもいいだろう。大水がきても橋が壊れないように水がスムーズに流れていくように、その障害となる欄干を設けていないのだ。始めてみる人には危なっかしくみえるが、これも住民の智恵である。沈下橋を見ると四万十に来ているんだという安心感みたいな気持ちになる。

ムテムカとは、江川崎より車で30分くらい上流の大正町という町にある造り酒屋の名前である。「無添無冠」と書く。これも川口さんに教えてもらった。名前から推察できるように、ここのお酒はお酒本来の原料以外を極力排し、醸造用アルコールも自家製のものを使用している。もちろ

んそれを入れていないものもある。賞や名前よりいいものをお客さんに届けたいという経営者の気持ちがその名前に込められている。大きな店ではないので高知以外には知られていないが、ファンは多らしく全国から注文があるようだ。こういうところは往々にして変に気難しかったり、観光観光していたりするとところが少なくないが、笑顔でそんな店のポリシーを話してくれるところがいい。最近年をとってきたのか日本酒がおいしいと思うようになってきたのだが、もちろんこの「無添無冠」はそうした私の乏しい経験の中で、一二を争うお薦めである。年に一度、希望者を募って酒造り体験をさせ、自分だけの酒を造ってもらうという行事も行っているようである。四万十の川原で四万十の水で作られた酒を飲み、四万十で釣れた鮎を食べ、環境の話に花を咲かせ、星を見ながら寝る。こんな贅沢なことがあるだろうか。（一昨年はキャンプしている横で鮎を捕っていた漁師の方から、食べきれないほどの鮎をもらった。）



四万十ではカヌーで下っていると、自分たちとカヌー以外全く人工物が視界にないことがある。のんびり流れに身を任せながら、ぼんやりそんな時を過ごす。水面に限りなく近いカヌーでは、ふつうの船では体験できない川との一体感がある。川面からの風景は、同じ川でも川土手から見るのとは全く違う風景となる。視線が変わるとこんなにも違って見えるということは、自分のものの考え方や捉え方にまで、影響を与えてくれたように思う。この四万十や錦川のような清流を下っていると、時に空を飛んでいるような錯覚を覚えることがある。川底の石が飛ぶように後ろに流れていく中で、そんな感覚になるときはたまらない。

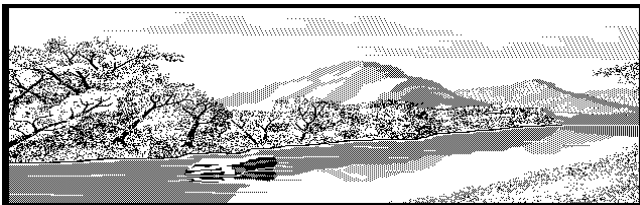
また今年、四万十に行きたいと思う。川口さんに言わせると、この四万十も十年前に比べると川沿いの道路の拡幅工事や観光化などでずいぶん厳しい状況にあるようだが、しかし、クロソンもまだまだ健在である。ノスタルジーでなく観光でなく、自分自身を見つめ直すために、自分の自然への見方を育むために、いやいやそんな理屈ではなしに、また行きたい。

小島さんと二葉山を歩いて

地球号会員 戸野直之

肌寒い冬の1日ではあったが、二葉山に登ってきた。今回は、小島さんの日課となっている散歩に同行させていただいた。自転車で小島画廊（小島さんのお宅）を訪れると、いつもの散歩スタイル（冬季用）に身を固めた小島さんが、いつもの優しい“小島スマイル”で階上から降りてこられた。さっそく、六条麦茶の段ボール箱を自作の背負い子に固定し、その中に黒色ゴミ袋と火箸をセットして（理由は後でわかります）出発準備は完了。小島さんのママチャリに続いて、ゆっくりとしたペースで二葉山を目指す。

二葉山の山歩きは今回で2度目である。広島生まれの広島育ちで三十路も半ばにさしかかろうという自分が、こんなに身近にある二葉山を初めて訪れたのが昨年秋。地球号の高校生講座で高校生たちと一緒に登ったのが、記念すべき第1回目だ。これまでヨーロッパアルプスやネパールヒマラヤをトレッキングしてきた経験はあるが、二葉山は長年？自身の“歩きたい山リスト”に名前すら登場することはなかった近くて遠い山。「灯台もと暗し」とはまさにこのことであろう。



私事ではあるが、昨年秋から高校生講座をきっかけに宇宙船地球号の会の活動に関わらせてもらっていて、その活動を通して二葉山が貴重な自然の宝庫であること、その一部を破壊する小学校の建設計画があること、小学校建設計画に反対する会（二葉山を守る会）があって小島さんがその代表をされていたこと、などを知った。そんな小島さんが、毎日の散歩で撮影した写真を元に二葉山の写真集「二葉山原生林」を出された。最初、写真だけ眺めただけで、不届きにも「少しピントと解像度が甘い」（35mmのコンパクトカメラなので当たり前）などと思っていたが、後半にある文章のページや写真解説のページと写真とを読み比べていくにつれ、当初そう思っていた自分が恥ずかしくなった。小島さんの二葉山に対する思いに満ちあふれたこの写真集は、ピントや解像度などが云々という小賢しい議論よりも、もっと大切なことを教えてくれていたのであ

る。目で見ると同時に、心で見ると写真集だと感じた。いけない、いけない。目に見えたものしか信じない、品質・性能第一という技術屋時代の悪い癖が出ていた。

小学校建設予定地をかすめながら西尾根に取り付く。無機質なコンクリート壁とアスファルト道が、ぬくもりのある木々とふかふかの落ち葉道に代わる。途端に街の雑踏が静まって元気な鳥の音が聞こえてきた。小島さんに続いて森の小道を歩くと、ほどなくして二葉山の中で小島さんがいちばん好きな場所である「神の庭」に到着。「神の庭」入り口で急に立ち止まれた小島さんを思わず追い越してしまっただけで、入り口で柏手を打つのが日課なのだそう。不届きな輩はあわてて引き返し、柏手を打った。神の庭に入ってその木々について話される小島さんの表情は、まさに“小島スマイル”。アベマキやヤマザクラ、ナナメノキ、シリブカガシなど、少年のように瞳を輝かせながら楽しそうに色々な話を話して下さる。こちらまで楽しくなってくるぐらいだ。



滑らかなナナメノキの樹皮に耳を当て、小島さんの言う「木の声」を聞く。しかし、悲しいかな修行不足の自分には、どんなに耳をこらしたつもりでも「ドクッ、ドクッ」という自身の心臓の音しか聞こえてこない。そのことを小島さんに話すと、「まあ、自分の心臓の音が聞こえるだけでもいいじゃないですか、街中ではそういった経験も少ないでしょう」と、いつもの“小島スマイル”で答えて下さった。それもそうだと納得する。